豊田浩志

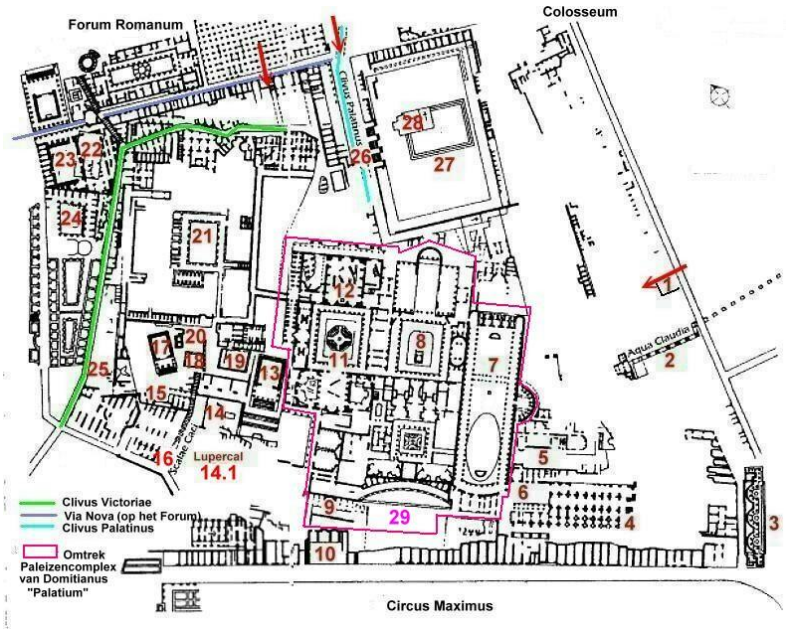
2018 年夏期調査報告

日程：8/27 成田発ローマ着　　9/13 ローマ発 9/14 成田着
Ostia Antica 遺跡, Roma 諸博物館, Palatino 丘遺跡調査
Pompeii, Herclaneum遺跡, 国立Napoli博物館調査

今回の２大成果

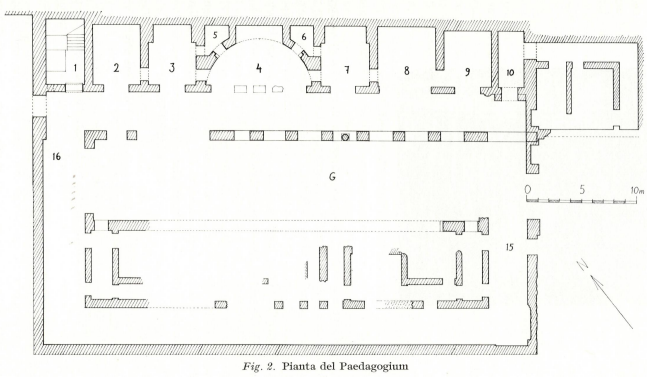
① パラティーノ丘麓「緑の散歩道」Percorsi del Verde 公開：1856 年発見の「瀆神の磔刑図」発見現場

豊田「パラティーノ丘『瀆神の落書き』序説：トポグラフィー的知見を中心に」豊田編『神は細部に宿り給う：上智大学西洋古代史の 20 年』南窓社, 平成 20（2008）年 10 月, 129-145.
豊田「ローマ時代の落書きが語る人間模様：いじめ、パワハラ、それともセクハラ？」上智大学文学部史学科編『歴史家の散歩道』上智大学出版, 平成 20（2008）年 3 月, 283-300.



Palatino 丘平面図（場所は 9）

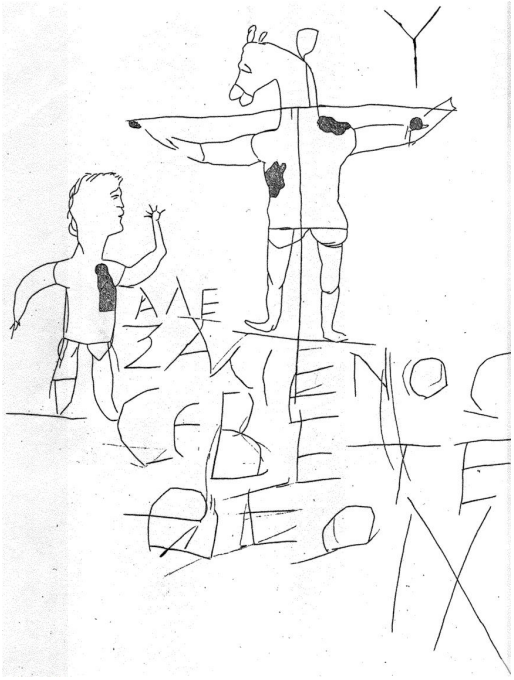
伝奏者屋敷(10)　小姓養成所(9)　宮殿



所謂「Paedagogium」（小姓養成所）平面図

東から見た光景

以前は、上部の宮殿跡からのぞき込んで、こういう風景しか見られなかった



部屋７右壁の落書き「冒瀆の磔刑図」

「冒瀆の磔刑図」が描かれていた部屋７右壁を見る

○ 解釈上の諸問題

a）図像

１：馬？/ラバ？/ロバ？

２：十字架　　罪状札、腰掛け、足台をちゃんと表記

３：登場人物の服装　　裸体ではない　御小姓装束？

４：礼拝者の身振り：５本指の強調

バチカン・ネクロポリス、霊廟Φの石棺の上蓋両端

夫 Q.Marcius Hermes と妻 Marcia Thrasonide：右手の３本指で三位一体を表現

b）graffito/i の解釈

・ΑΛΕ　　アレ

ΞΑΜΕΝΟΣ　　クサメノスは
ΣΕΒΕΤΕ　［ΣΕΒΕΤΑΙ］　　拝む
ΘΕΩΝ　［ΘΕΟΝ］　　（単数の＝唯一の＝キリスト教の）神を

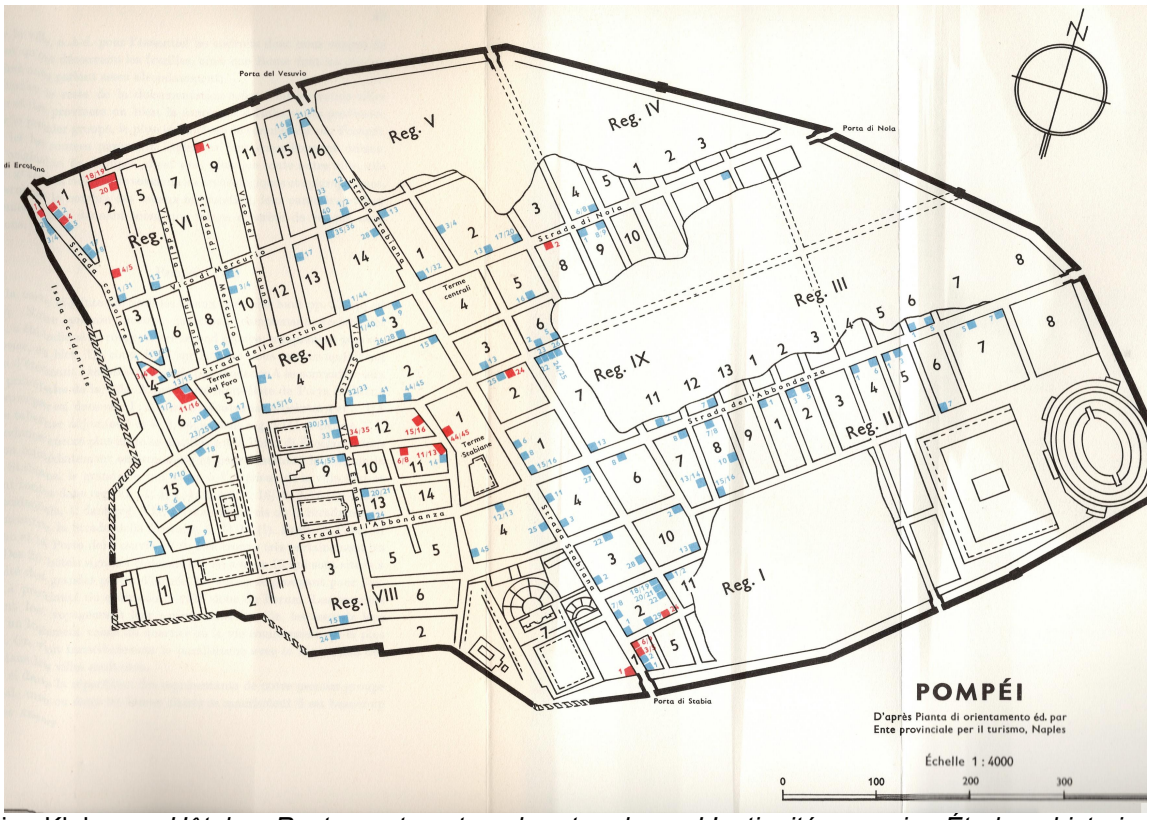
（図像部分幅33×縦27cm：銘文部分21×20cm：文字2～8cm）

・右上にみえる「Y」とは、 Υιός του Θεού「神の息子」だと面白いが
・落書きにしては大きすぎる　―＞　むしろ告発広告の趣き
　　―＞　【新説】秘められたスキャンダルの存在？

② Pompeii, VII.11.11-14：Hospitium Christianorum（キリスト教徒のホテル）

後２世紀末のテルトゥリアヌス『護教論』40.8：「･･･（キリスト教徒がいなかった時にも、どれほどの災害がローマ帝国を襲っていたか）･･･［8］だが、烈火が天からウルシニイの町に、山からポンペイの町に降り注いだとき、トゥスキアの人びともカンパニアの人びとも、その原因をキリスト教徒の罪に帰さなかった。」Sed nec Tuscia iam tunc atque Campania de Christianis querebantur, cum Vulsinios de caelo, Pompeios de suo monte perfudit ignis.

このテルトゥリアヌスの言を信じるなら、後79年8月のウェスウィオス山の噴火時に、カンパニアないしポンペイにまだキリスト教徒はいなかったことになる（多分に修辞学的表現だったとしても）。



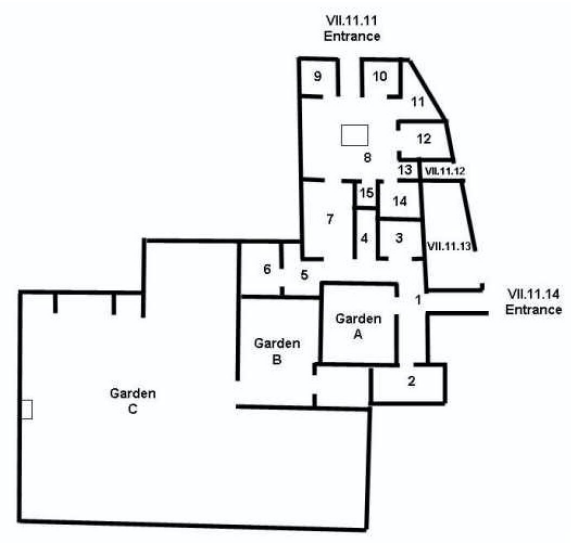
Tönnis Kleberg, *Hôtels, Restaurants et cabarets dans L'antiquité romaine.Études historiques et philologiques,* Almqvist & Wiktsells Boktryckeri AB,1957 掲載（赤印＝売春宿　青印＝居酒屋）

ところが、1862 年、なんとポンペイが火山灰に埋もれてほぼ 1800 年後の発掘で、ポンペイの住宅の壁からキリスト教徒の存在を証明するかのごとき落書きが見つかった。番地

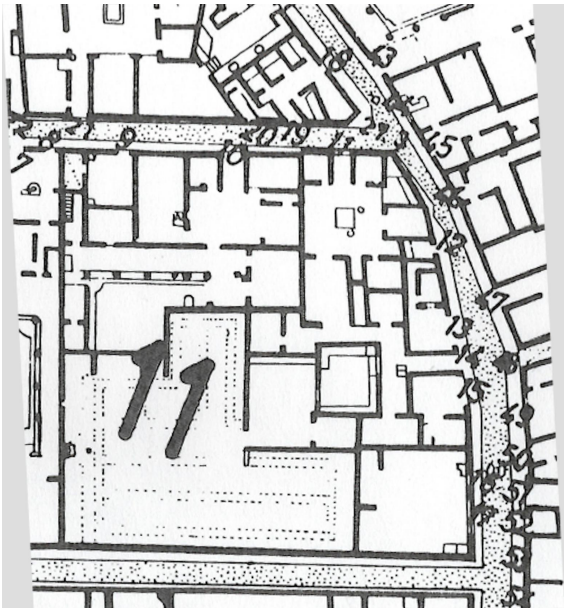
は VII.11.11-14 で、それゆえ考古学者たちによって「キリスト教徒のホテル」（Hospitium Christianorum；ないし「ユダヤ教徒のホテル」）と命名された建物:一説では全部で 50 部屋のポンペイ屈指の規模だった、というよりは、ポンペイで最も有名な角地に位置する「売春宿」Lupanare（VII.12.18-20）と通りを隔てたすぐ南、といったほうが早いかもしれない。ちなみに男根を頂いた番地 12 は内階段の下を利用した「娼婦の小部屋」Cella meretricia だった。

くだんの落書きは、部屋番号8の西向きの壁面に、木炭で薄く書かれた6行のラテン語で、その4行目に「Christiane」（Alfred Kiessling説）なり、「Christianos」（Giulio Minervini説）と解読可能の文言があった（＝*CIL*,IV,679）。最初にそれを見て読解したのはAlfred Kiesslingだった。そしてその落書きが消滅する以前に実見しえたのは、他にGiuseppe FiorelliとGiulio Minervini の3人のみで、Giovanni Battista de Rossiは1864年に自著にMinerviniによる解読を採用して掲載した。

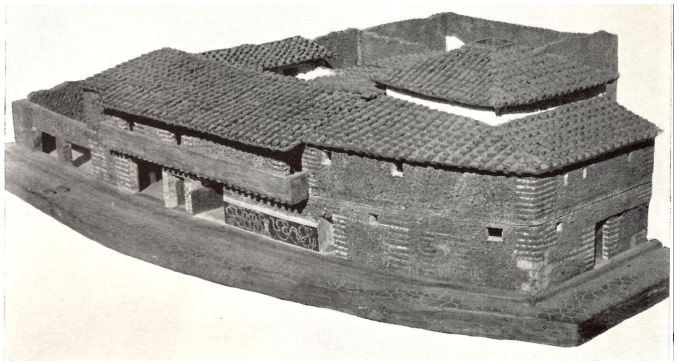
この数行全体の解読は諸説あって今後の検討課題だが、キリスト教徒について誰かが悪口を書いていたのであり、この落書きをもってポンペイにキリスト教徒が居住していたというよりも、どうやらこのホテルに宿泊したユダヤ系の旅行者が書き付けた、というのが真実だったようだ。皇帝ネロのローマでの迫害は後64年、町埋没の15年前のことだった。



部屋番号 8 の左壁に落書きが書かれていた（図は一部不正確）

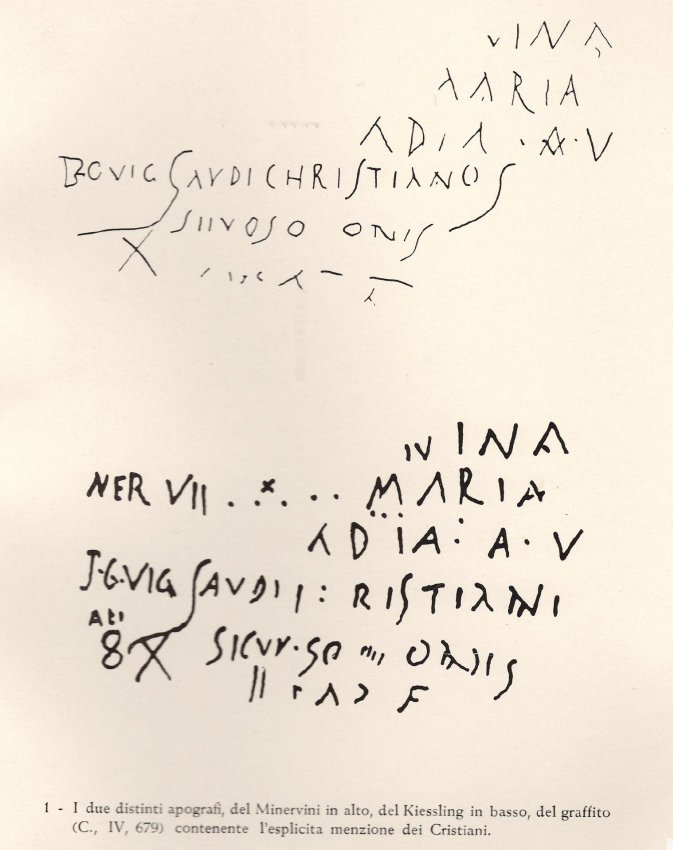


このホテルのすぐ北の角地 18-20 が「売春宿」



17　16　15　14 13　　12　　11

南から見た角地「売春宿」



読解2例（上がMinervini説、下がKiessling説）

北から「キリスト教徒のホテル」を見る

番地12「娼婦の小部屋」の上の男根

番地12の入り口

番地12の内部（内階段下の空間利用）

【思わぬ付録】番地12に接する番地13の奥にトイレ発見！（上階から後付けの土管が降りているので上階にもトイレがあるはず。内階段の二階から三階への踊り場隅に位置していたというべきか）

番地12「娼婦の小部屋」入り口

番地13の奥のトイレと土管

トイレの下部

【付論】2016 年新刊のある本によると、敷石上に十字の印があり、それをたどると･･･

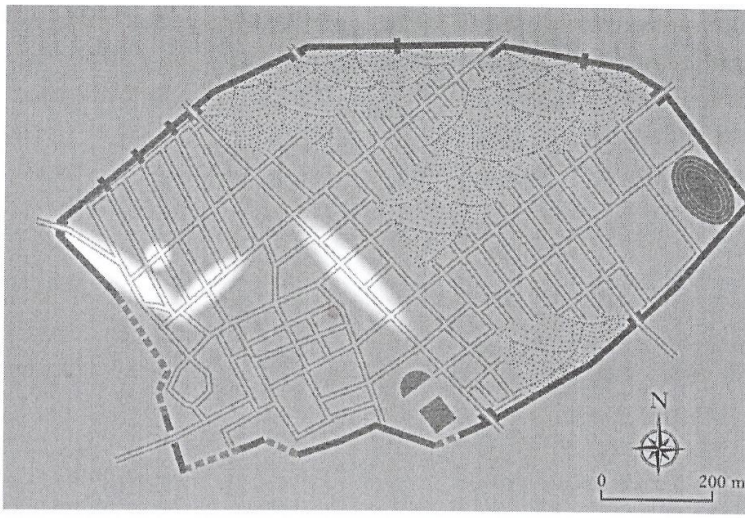


Figure 12.4. The highlighted areas are the find-spots of two groups of cross-shaped marks incised into Pompeii's street paving stones.

↑　番号 1

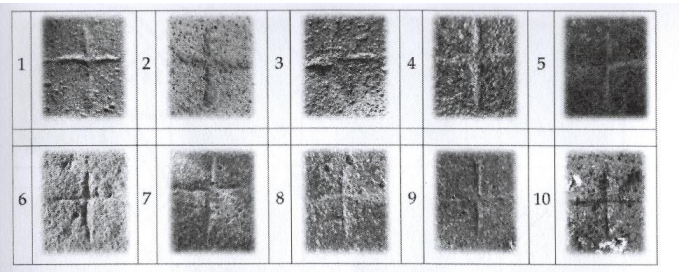


Figure 12.5. The paving-stone crosses of region 6, numbered.

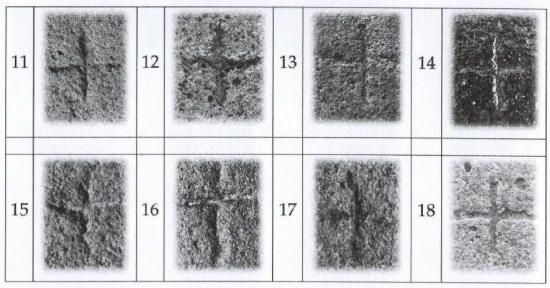


Figure 12.8. The paving-stone crosses along Via Stabiana, numbered.